ISSN 2436-2441

明治学院歴史資料館

News Letter

No.12

2020

目次：

1　巻頭言 明治学院歴史資料館ミュージアム・ビジョン策定にあたって
/長谷川 一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）

2-3 山田幸三の日記と九十九里教会所蔵写真について
/石崎 康子（特任研究員）

4-5 井深梶之助、俄に歌読みとなる
/松本 智子（特任研究員）

6　2020 年度博物館実習
/亀元 円（学芸員）

7　資料紹介 賀川豊彦草稿「戯曲 一人残された女(創作)」
/小杉 義信

8　2020 年度主な活動、その他

明治学院歴史資料館ミュージアム・ビジョン策定にあたって

長谷川 一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）

わたしたち明治学院歴史資料館には、ふたつの使命があります。ひとつは、学院創設以来の種々の歴史資料の収集・整理・管理・活用をとおして、明治学院の足跡を確かなものにすること。もうひとつは、その価値を学院内外と共有し、学院の未来に資するための礎を提供することです。さらに、学院がわが国でもっとも長い歴史をもつキリスト教教育の学校であり、長くその中心的役割をはたしてきた事実を踏まえると、本館の活動は、たんなる一学校史にとどまらず、日本におけるキリスト教教育の歴史をも射程におさめる必要があります。

こうした使命にこたえ役割をはたしてゆくための具体的な指針として、このたびわたしたちは「明治学院歴史資料館ミュージアム・ビジョン」を策定しました。これは、本館がみずからをミュージアムと位置づけることで成長してゆこうという宣言です。

「ミュージアム museum」は、日本では美術館と博物館に分裂していますが、欧米ではひとつのまとまった概念です。ラテン語 muse を語源とするこの言葉は、もとをたどれば、ギリシア神話で学芸を司る女神たち（ムーサ）に由来しています。

こんにち世界には多様なミュージアムがあまた存在します。しかし、いずれにも共通するのは、研究、教育、情報発信の三つを柱に活動を展開させていることであり、その根幹に資料の収集・整理・保管という仕事が据えられていることです。本館も例外ではありません。

ミュージアムにとって資料の収集・管理業務は、現在も未来も、学院が存続するかぎり永続的におこなわれなければなりません。なぜなら、整理・管理の行き届いた分厚い資料群こそが、学院の歴史的な足跡や価値をめぐる研究・教育・情報発信といった諸活動の基盤となるからです。

学院はすでに膨大な資料を所蔵してはいるものの、管理面ではあいにく、これまで手つかずにちかい状態でした。そこで本館では、関係各所の多大なご支援のもと、数年をかけて体制を整え、すこしずつ整理をすすめてきました。その成果をもとに、2020 年度には、蓄積した資料情報を利活用するべく、デジタル・アーカイヴスの構築にとりかかりました。2021 年度からは、資料整理やアーカイヴの構築をはじめとするミュージアム運営のさまざまな過程で、学院に学ぶ生徒・学生たちにもかかわってもらう可能性についても検討しています。かれらとの対話や交流は、本館にとって、学院が築きあげてきた多様な価値を共有してゆくうえで、新たな道を拓いてくれるにちがいありません。

現在、本館の実務を中心的に担うのは、事務職員 3 名、学芸員 1 名と特任研究員 2 名。ちいさな組織ではありますが、力をあわせて、みずからの役割をはたすべく日々業務に励んでいます。これからも、ミュージアムとしての気概と展望を胸に、明治学院のいっそうの発展に貢献してゆく所存です。みなさまの温かなご理解とお力添えを賜りますればさいわいと存じます。

山田幸三の日記と九十九里教会所蔵写真について

石崎 康子（特任研究員）

昨年度『明治学院歴史資料館資料集』(以下「資料集」)第 16 集で取り上げた山田幸三の 2 冊の日記､「二榎日記」(明治 26(1893)年)･「今里日記」(明治 27 年)のうち､「二榎日記」には、7 月下旬に九十九里教会会員の集合写真及び会堂の写真を撮影したとある。令和 2(2020)年夏に日本キリスト教団九十九里教会（以下九十九里教会）所蔵の写真資料を調査する機会を得、日記に記された写真であると考えられる 2 枚の写真の所在を確認したので、報告したい。

1. 日本キリスト教団九十九里教会所蔵写真について

山田幸三の「二榎日記」、1893 年 7 月 30 日条、31 日条に次のような記載がある。

七月三十日　晴天　安息日

(中略)写真師横浜太田町の某なる者ハ兼て田越の鷲山方へ来り居る由に聞き居りしが、此日会堂を写さんとて来りしが光線の都合にて明朝に延されたり、併し我等人影ハ此日にても充分差困なきよしにて一同採影せし、人ハ山田幸律・同幸三・同俊三・同ふく・同りゑ・里見富三郎・同純吉・同郎吉・同かし・若林ふじ・同母・同芳郎・筧つや・同勝次郎・息女・秋葉太平二・石田平三郎・筒井小太郎・鈴木二郎・向後鎌吉・布施浅二郎・筧嘉猷・山田わか・馬場姉・浅野氏・小川利八郎・川崎伝左衛門・多三郎氏・市原計衛氏・海保能太郎氏の諸氏なりき、我家にても家内一同採影せり、

七月三十一日　晴天

(中略)午後四時半頃降雨後昨日朝来る積なりしが降雨為来らざりし由にて午後に延したりとて会堂の全景を採られたり、余及び里見の一家女の成人を除けての人等も其景を添えやりたり、尚ほ其後里見一家も採影せり(後略)

日記によると、1893 年 7 月 30 日、横浜太田町の写真師が幸三の父山田幸律ほか 29 名の集合写真を撮影したという。さらに翌日の夕方には会堂の撮影を行い、幸三と里見家の数人が撮影に加わったとある。

集合写真【写真 1-1】の裏面【写真 1-2】には、「明治廿六年七月三十日写ス、日本基督九十九里教会員三十五名茲ニ撮影ス　松尾　若林姓」と明治 26 年 7 月 30 日に撮影された集合写真であることが記されている。「若林」とは、旧掛川藩士で、掛川藩が松尾に移転後松尾藩となってからは松尾藩士となった若林芳郎家で、九十九里教会設立当初からの教会員である。芳郎の姉りゑは山田幸三の父幸律に嫁ぎ、りゑの妹で芳郎の姉よねは里見富三郎に嫁いだ。日記にも出てくる里見純吉の母親である。共に松尾藩士であった若林・里見・山田家は親戚関係にある。写真裏面の記載は、「若林姓」とあることから、若林芳郎家の者が記したものであろう。表面の集合写真は、現像の不備か日焼けのためか、画像が不鮮明である。幸三の日記には総計 30 人が写真撮影をおこなったとあるが、写真裏面の記載にあるとおり、35 人が写っている。当日は安息日であり、会堂に会員が集まっていたことから、教会員の集合写真を撮影したのであろう。

【写真 1-1】九十九里教会員の集合写真 1893 年 7 月 30 日撮影
九十九里教会所蔵

【写真 1-2】写真 1-1 の裏面

【写真 2-1】は、会堂の門の外から「日本基督　九十九里教会」の看板の掛かる門と、その奥に建つ会堂を撮影した写真である。写真の下には鉛筆で右から「重吉・豊吉・里見清子・山田三郎・純吉・山田幸三(良一兄)」と記されている。その裏面【写真 2-2】には、「日本基督九十九里教会　明治廿六年七月三十一日写ス　松尾　若林姓」と記されている。いずれも幸三の日記に記された写真撮影の記事と一致する。

【写真 2-1】九十九里教会の会堂と幸三たち
1893 年 7 月 31 日撮影 九十九里教会所蔵

【写真 2-2】写真 2-1 の裏面

2.　写真の撮影者について

写真の撮影者について、「資料集」第 16 集では、註 26-57(359 頁)に太田町の某は不明であると記した。

今回九十九里教会所蔵の 2 枚の写真を見るまでは、撮影者に関する手がかりはなかったが、【写真 1-2】には写真撮影者のものと思われる青色の印【写真 1-3】と、【写真 2-2】の左下には赤い小さな丸印【写真 2-3】を見ることができる。この印を手掛かりに撮影者について考えてみたい。

【写真 1-3】には「R. SATO. PHOTOGRAPHER. No.1. Ohtamachi 1 chiome, Yokohama, Japan」と記されている。また【写真 2-3】には赤い印で「 ℟ 佐藤」とあることから、九十九里教会会員および会堂の写真 2 枚を撮影した写真家は、「R. 佐藤」であることが分かる。

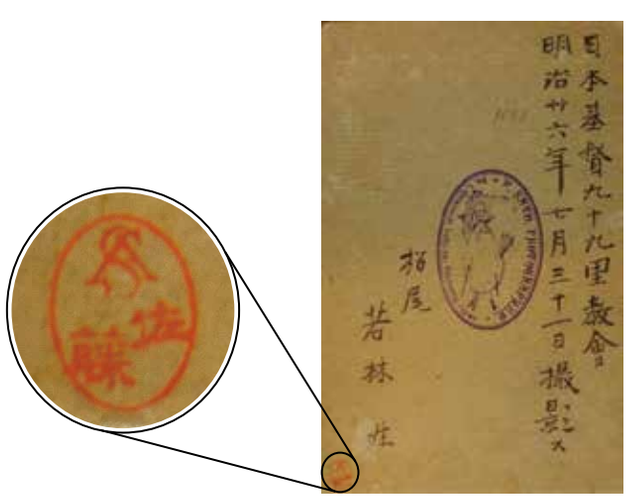
【写真 1-3】

「R. 佐藤」という姓名と横浜太田町 1 丁目 1 番地という住所を手掛かりに、改めて斎藤多喜夫氏(元横浜開港資料館調査研究員)による「横浜の写真家一覧」(『[増補] 採色アルバム明治の日本　〈横浜写真〉の世界』(横浜開港資料館編　2003 年　有隣堂)等を見てみたが、見つけることはできなかった。しかし同氏より 1928(昭和 3)年 5 月 13 日、下田に下岡蓮杖顕彰碑が建立された際、顕彰碑設置の寄付者名が『アサヒカメラ』同年 7 月号に掲載されており、そのなかに神奈川県写真師会の佐藤六之助の名があることをご教示いただいた。

神奈川県写真師会は、大正 4(1915)年に創設された同業者組合である。神奈川県写真師会の会員名簿を探して、『社団法人横浜実業組合聯合会会員名簿　大正 14 年 1 月現在』(横浜実業組合聯合会[編刊]、[1925 年])等に当たったが、神奈川県写真師会に関する記載は見られず、佐藤六之助の名を見つけることはできなかった。今後の写真史研究の進展に期待したい。

なお日記には、「R. 佐藤」は、田越(田越村、現在の山武市田越)の鷲山を訪れ、その後九十九里教会会員の写真を撮影したとあり、1893 年当時、松尾には写真館が無く、当時の写真撮影は、「R. 佐藤」のような各地を移動しながら撮影を行う写真師により行われていたことがうかがわれる。一方、九十九里教会は、1902 年に伝道師の小林格が桐生教会に転任する際の送別会で撮影された集合写真を所蔵されているが、その写真の台紙には「山武大平村　鈴木祐一郎写」と記されている。1900 年代になると、写真の需要が増大したのであろう、写真師が大平村（現在の山武市松尾町の一部）に定住していたことがうかがわれる。松尾周辺の近代化を示す一事例である。

本稿の執筆にあたっては、九十九里教会および斉藤多喜夫氏にお世話になった。記して謝意を表します。



【写真 2-3】

井深梶之助、俄（にわか）に歌読（うたよ）みとなる

松本 智子（特任研究員）

明治学院の第２代総理として知られる井深梶之助が、晩年にかけて多くの和歌を詠んでいることはあまり知られていない。その彼が「歌読み」となったのは、1897（明治30）年、米国へ向かう船上でのことであったとされる。何が彼を「歌読み」にしたのか。

1　太平洋上での和歌三首

ヘボンから明治学院総理の後任を任されてから約６年が過ぎようとしていた1897年５月18日、井深は数え年44才、米国ノースフィールドで開かれる万国学生基督教青年同盟会会議に日本学生基督教青年会同盟の代表として出席するため横浜港より出航した。この航海の様子については、妻せき子宛書簡(註1)のほか、井深の日記(註2)（以下、日記）、『福音新報』(註3)および1897年11月に作成された日本学生基督教青年会への「報告書」(註4)などに記されている。

それらによると、井深が乗船したタコマ行のパサン号は出航の翌朝より悪天候に見舞われ、強い波風によって激しく揺れるなど、航海は困難を極めた。加えて、10日目以降には蒸気機関の故障がたびたび起こり、果ては太平洋上を三日三晩漂流して、タコマへ到着したのは６月８日。当初の予定よりも一週間ほど遅れての到着であった。

タコマ港到着後の夜に書かれた妻せき子宛の書簡には、航海の顛末が語られるとともに、次のような詞書と和歌三首が記されている。

自分事不幸ニして未た曽て和歌を学候事なし、然るに此度の航海ニて苦敷マギレに俄に歌読みとなり候間、二三首御覧ニ入候。

海上不穏

なか〳〵に浪風あらき大うみを誰か太平とよびそめにけん

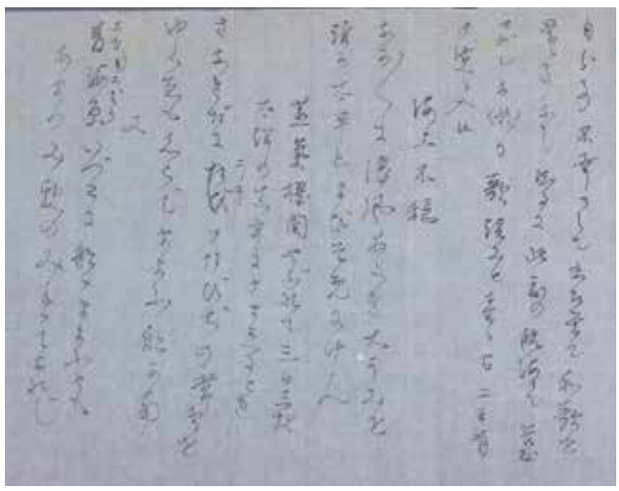
蒸気機関やぶれて三日三夜太洋の真中にさまよえるとき

さなきだにうきハたびぢの常なるをゆくゑもしらでまよふ船かな

又

青海原（あをうなばら）いづこに船ハまよふともあまつみ※親のみ手ははなれじ

（※日記では「親」を「神」と表記）



1897年６月８日付　井深せき子宛書簡（部分）

一首目「なかなかに」の歌は、ずいぶんと波風の荒いこの広大な海を、一体誰が（「穏やか」とういう意味を持つ）「太平（太平洋）」と呼び始めたのだろうか、という意。この歌は日記５月21日条にも記されており、当該歌の前には「曇天北風起リ、寒気大ニ加ル、船又動揺ス、室内ニアリ食堂ニ出ルコト不能」とある。悪天候によって船が大いに揺れ動くため、井深は一人船室に籠もっていたことがうかがわれる。大荒れの海の様子を身体で感じながら、その似ても似つかぬ「太平」という名に疑問を投げかけてみせたのである。

二首目「さなきだに」の歌は、そうでなくても思いのままにならない辛さは旅路には付きものであるのに、行く先も分からず（この大海原で）彷徨っている船であるよ（今回の旅は一層辛いものだ）、という意。古典和歌では、「うき」に辛いという意味の「憂き」と、水に漂うイメージを伴った「浮き」を掛けることも多く見られるが、井深も同様の掛詞を用いて、辛い心情とともに、海で彷徨う船の不安定感を表しているものと思われる。

三首目「青海原」の歌は、この青々として広い海のどこかに船が迷ったとしても、天の神の御手は離れることはあるまい（きっと神が助けてくださる）、という意。

二・三首目の和歌は、いずれも日記５月29日条の欄外に書かれている。蒸気機関に破損が生じ、三日三晩太平洋上を彷徨う状況に置かれた井深。その心情は計り知れないものがあるが、同２９日の日記中には「I trust in God and wait.」とあり、「報告書」にも「何時タコマに到着し得べきか船長も更に見込付不申、船員船客一同心配致候得共、小生は幸に神は必ず我等を助け給はんと確

信罷在候」と書かれており、神の加護を信じて祈る井深の様子がうかがえる。せき子宛書簡では「今回の旅行は私用に非ず、主の御用を帯びて旅行致し候事故、海陸共に必ず主の御保護あるべきことを確信して疑わず」と神への信心を述べる一方、「よしや神の測るべからざる御摂理によりて之れが為に死することありとて更に遺憾なき覚悟にて罷り在り候得共、海上万里はるかに西の方を望みては覚えず涙下だり申し候」と記しており、死が脳裏をよぎる状況のもと、日本にいる家族を想ったのであろう、思わず落涙したことを吐露している。旅という非日常に加え、悪天候や船の故障によって太平洋を彷徨うという稀有な体験は、井深の感性をより鋭くしたようである。

まだ一般向けの写真機が普及していない時代、旅行者の中には印象に残る風景や自らの思いを和歌というフレームの中に詠み込むことで形に残した者も多い。井深もまた、船上での思いを和歌というフレームの中に留めるため、俄に「歌読み」となったのであろう。

2　井深梶之助をめぐる「歌読み」たち

先のせき子宛の書簡によると、井深は和歌を学んでこなかった自らに対し「不幸」であるという認識を持っていた。井深の周辺には少なからず「歌読み」がおり、彼らの存在がそう思わせた可能性もあるが、また一方で創作意欲を刺激する存在であったと考えられる。

「歌読み」の一人に湯谷磋一郎がいる。湯谷は日本基督教会委員の一人であり、1897 年当時明治女学校および共立女学校の教員を務めていた (註 5)。同志社在学中に香川景樹派の歌を学び歌人として知られていた人物である。井深もたびたび寄稿している『福音新報』において、湯谷は紫苑と号して和歌や和歌に関する記事を投稿していた。井深が渡米する一週間ほど前の 5 月 9 日に送別会が開かれ、その席上で湯谷から和歌三首がはなむけとして送られており (註 6)、その三首を井深は翌日の日記 (註 7) に書き留めている。渡米直前に歌人湯谷から和歌を贈られたことは、船上における井深の創作意欲に少なからず影響を与えたのではないだろうか。

また、1895～1896 年頃の『福音新報』には、湯谷の投稿以外にも和歌や和歌関連記事も比較的多く見られ、「花もみじ」という和歌投稿欄には案山子（かかし）の舎（や）社中の和歌などが掲載されていた。案山子の舎とは歌人の池袋清風のことである。清風の弟子で案山子の舎の社友として異彩をはなち、多くの和歌を残した大西祝は、学者でもあり、明治学院神学部で心理学を教えていたこともある (註 8)。

井深の旧友の中にも、奥野昌綱・原六郎など、和歌を得意とするものがいた。奥野は海野遊翁（1794－1848）を、原六郎は井上通泰（1867―1941）を師として和歌を学んでいる (註 9)。

身内にも和歌に堪能な人物がいた。井深の妹たみの夫にあたる真野文二である。真野は若い頃より和歌を好み、橘道守（1852－1902）に和歌を学んだ。真野の歌集『蜂声集』(註 10) によると、1886（明治 19）年海外に行った折に詠んだ和歌を中心として小冊子にまとめ友人に贈ったこともあるという。

真野の歌集『蜂声集』の序文を書いた歌人佐佐木信綱（1872－1963）は 1892 年に刊行した著書『歌のしをり』の緒言において次のように記している。「歌ハたゞ歌人の間にもてはやされてゐしのみにて、おしなべての世には更にかへりみる人だになかりき、（中略）此頃にいたりて、世人もやうやう歌に心をかたぶくやうになりぬ、（中略）あはれかく歌の道の盛ならんとするを見る我よろこび、何にかハたとへいはまし」。歌人だけではなく、広く大衆が和歌に関心を寄せる様子が示されている。こうした時代の風潮も井深が「歌読み」となった背景として押さえておきたい。

1897 年、米国に向かう船上で、思わぬ困難に遭遇したことが契機となり、俄に「歌読み」となって和歌を詠んだ井深の姿を妻せき子宛の書簡からうかがうことができた。先の三首は、おそらく井深の和歌に関するごく初期の事跡と言える。その後も井深は折に触れ和歌を詠んでいるが、晩年に特に多い。もと武士であり、またキリスト教者でもある井深の和歌は、古今集など古典に根ざしたものから、聖書を踏まえたものまで幅広い。井深の「歌読み」としての姿がこのあとどのように展開していくのか、別稿にて検討したい。

(註 1)「〔書簡〕」、当館所蔵資料 ID:1201610694。
(註 2)「明治三十年当用日記」、当館所蔵資料 ID: 1201610860。
(註 3) 106 号、1897 年 7 月 9 日。
(註 4) 当館所蔵資料 ID: 1201610122。
(註 5) 青山なを著『明治女学校の研究』（慶應通信、1970 年）789 頁、「旧東京府文書」所収の「履歴書」による。
(註 6)『福音新報』第 98 号、1897 年 5 月 14 日。
(註 7)（註 2）と同じ。
(註 8)『明治学院歴史資料館資料集』第 16 集、31 頁および 151 頁参照。
(註 9)　黒田惟信著『奥野昌綱先生略伝並歌集』（一粒社、1936 年）、原邦造著『原六郎歌集』（私家版、1935 年）。
(註 10) 私家版、1941 年。

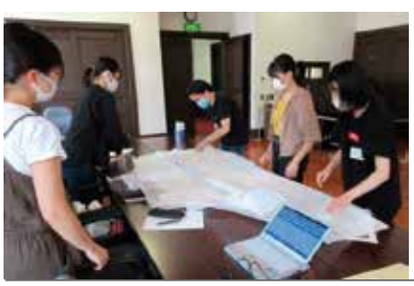
2020 年度博物館実習

亀元 円（学芸員）

明治学院歴史資料館では新型コロナウィルス対策をし、2020 年 9 月 14 日（月）から 18 日（金）の 5 日間、博物館実習をおこないました。 5 日間の実習では、実習生たちがこれまで学んだこと、またはこれから学ぶことに近い内容をカリキュラムに組み込み実習をおこない、成果物として明治学院第二代総理 井深梶之助についてまとめた展示と展示リーフレットを作成しました。実習中の写真と共に、カリキュラムを抜粋しご紹介致します。

9 月 14 日(月)

歴史資料館の歴史と現在の活動、文化財三棟（チャペル、記念館、インブリー館）について説明を聞き、展示室の見学をしました。また、午後には古文書の読み方と整理の方法を学びました。

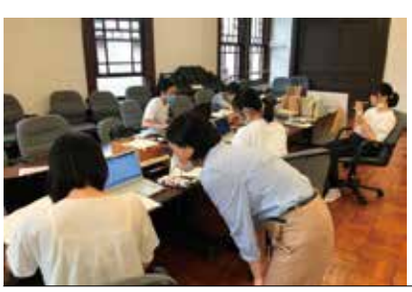


9 月 15 日(火)

午前中は資料が配架されている倉庫の見学や資料の保存について学びました。午後は展示プランの作成や、実際に展示をするケースの計測、展示で使用するためのハレパネの作成方法を学びました。

9 月 16 日(水)

午前中はくずし字の読み方、巻子本の取り扱い方、午後は大学内の和室にて掛け軸の取り扱いや調査の方法を学びました。



9 月 17 日(木)

実習生が各自調査、まとめをおこないました。くずし字などの資料は少しずつ調べながら読み進めました。展示に向けてパネルに使用する文章の最終確認やハレパネの作成をおこないました。

9 月 18 日(金)

展示をする資料を設置し、最終調整をおこない、展示「IBUKA ～明治学院に残したもの～ 」の成果報告と振り返りをおこないました。

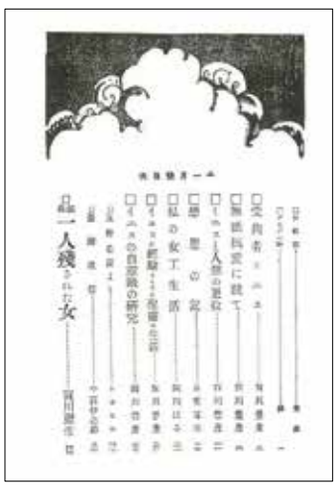
実習生たちにとっては少し忙しいカリキュラムでしたが、充実した実習であったと思います。5 日間という限られた時間の中で、学芸員に必要な様々なことを学び、自ら考え、他の実習生と協力し展示を作った経験を今後様々な場面で活かして欲しいと思います。

※現在展示室は明治学院の学生・生徒を対象に予約開館をしています。

資料紹介 賀川豊彦草稿「戯曲　一人残された女」

小杉 義信

「戯曲　一人残された女」は『賀川豊彦主筆 雲の柱』1922 年 11 号に掲載された作品で、賀川自家用箋 200 字詰め 19 枚(草稿)の小作品である。



(写真 1)掲載誌目次

(写真 2)自筆草稿 1 枚目

本作品はヨハネ福音書 8:1-11 を題材としている。律法学者･ファリサイ派の人々は「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」(ヨハネ 8:4-5※)とイエスを訴える口実を引き出そうと試みる。しかし、イエスは何もお答えにならない。

一方、賀川は親類の者に**「義父(おやじ)さんも、こんな女は面目なうて連れて歸ることが出來んから打殺してくれと云ふて居りますが、先生の御意見はどうで御座りますか？」**と言わせ、**「姦通を正當だとお思ひなさるのですか？」**とイエスに詰め寄る群集の姿を描く。

賀川は本作品を次の様な対話で始め、ここに至る伏線を描く。

義い人「私はどうもあなたがあんなものを保護せられる理由がわから無いのです････あなたはどんな悪いものでも救はれると云はれるのですか･･･」
イエス「私の使命がそこにあるのです。私の此世に生まれて來た理由は罪人の友となる爲です。壯健なるものに醫者の助けを求めませぬ。病あるものみ醫者の助けを求めます。私の使命は罪ある人を招いて悔改めさせることにあるのです。」

このイエスの台詞に賀川は本作品を見る（あるいは聴く）者へ「あなたも悔改めに招かれている一人なのだ」とのメッセージを込めたのではなかろうか。

さて姦淫の場から引き出された女に対して**「先生、やっても善いでせう」**と、石で撃とうする群衆にイエスは静かに口を開き**「あなた達の中で罪の無い者が先づ最初の石をお投げなさい」**と言う。その言葉を聞いた群衆は一人二人と去り、全ての者が去り残されたのはイエスと女だけとなった。イエスは女に問いかける。

イエス（靜に女に）「あなたを訟へるものは何處へ行きましたか？あなたの罪を定(き)める者は無いやうですね」
女「主よ、誰もありません」

掲載誌では草稿から欠落したこれに続く場面が描かれ(写真 4 赤枠内)、「一人残された女」の上に「私の此世に生まれて来た理由は罪人の友となる為です。私の使命は罪ある人を招いて悔改めさせること」が実現したことを告げて幕を下ろす。

(写真 3)自筆草稿 19 枚目

(写真 4)掲載誌　最終場面

本作品は聖書の記事を賀川流に脚色してメッセージを伝えようとした秀作と言えよう。それにしても本作品のクライマックスとなる場面が理由は不明であるが草稿から失われていることは誠に残念である。

※引用聖句は「聖書 新共同訳」による。

明治学院歴史資料館　2020 年度主な活動

文書・資料の調査・整理及び目録作成、デジタル化

所蔵資料の中から 3,000 点を目標に調査・整理を行い、あわせて目録を作成（専門アーキビストへの作業委託による）。

所蔵資料の中から 644 点のデジタル化（専門業者による）。

資料の受贈

伊藤三千子氏　井深梶之助関係資料 176 点

河野宏子氏　『岸田吟香－激動の時代を走りぬけた先駆者－』1 点

五嶋正道氏　マンドリンクラブ関係資料他 3 点

里見眞氏　里見純吉ほか 10 名 野球部メンバー集合写真 1 点

野田秀三氏　高谷道男氏旧蔵書簡他 75 点

樋口昌平氏　昭和 12 年『高商時報』4 点

山田幸信氏　『河野家の歴史』（河野美代子編刊 2008 年）1 点

講演会・教育支援等

9 月 14 日(月)～18 日(金)　2020 年度博物館実習

11 月 17 日(火)　学生に向けた歴史的建造物の見学

12 月 10 日(木)　学生への調査協力（高輪支所区民参画事業「高輪今昔物語」）

購入資料

『福音新報』　復刊第 1 号～52 号・69 号～83 号合本

『英語發音秘訣』

賀川豊彦草稿「戯曲 一人残された女」

三宅克己書簡

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第 17 集　　2021 年 3 月刊行

山田幸三記「明治二十八年日誌」

本書は、第 16 集に引き続き、1897（明治 30）年に明治学院神学部を卒業した山田幸三（1873 - 1940）が在学中に書いた日記を翻刻し、解題を付したものです。日記が書かれたのは、日清戦争が終結に向かう 1895 年。戦時下の高揚感も垣間見えます。卒業式・地方への夏期伝道・運動会・他校とのベースボールマッチなどの内容をはじめ、彼を取り巻く明治学院の教員や仲間たち、キリスト教関係者たちの姿が、青年幸三の瑞々しい視点で記されています。幅広い分野でご活用いただけると幸いです。

2020 年度　歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長　長谷川一　歴史資料館長(文学部教授)

委員　戸谷浩　図書館長(国際学部教授)

松本一裕(文学部教授)

ヴァラー・モリー(法学部専任講師)

植木献(教養教育センター准教授)

秋山智一郎(法人事務局長)

鈴木直子(図書館次長)

岡村淑美(明治学院高等学校教諭)

青野由美(明治学院東村山高等学校教諭)

歴史資料館

協力研究員　辻直人　木村一

特任研究員　石崎康子　松本智子

学芸員　亀元円

事務局　三上耕一　安藤正明　小杉義信

明治学院歴史資料館　News Letter No.12
発行者　明治学院歴史資料館
発行日　2021 年 3 月 31 日
〒108-8636　東京都港区白金台 1-2-37
電話：03-5421-5170
E-mail:shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
http://shiryokan.meijigakuin.jp/